

<実践報告>

生活科における自然体験が児童の成長に及ぼす影響  
— 第1学年「蘭川の探検」とその8年後の追跡調査を通して —

塩原孝茂 長野市立吉田小学校  
土井 進 信州大学教育学部教育科学講座

The Influence Affects Mental Growth of Children by “Nature's Classroom”  
in Life Environment Study  
— First Grade “Exploration of Araragi River”, and Follow-up Survey Eight Years After —

SHIOHARA Takashige : Yoshida Elementary School, Nagano City  
DOI Susumu : Faculty of Education, Shinshu University

In this paper, it is considered what influence is made on first grade elementary children by our activity ‘Exploration of Araragi River’. The children related nature to an event, and this activity deepened their relationship to people in their lives. The results of the follow-up survey eight years after the activity show that they recall the activity vividly. They also continue to relate to nature.

【キーワード】 生活科 自然体験 コミュニケーション力 自然への興味・関心

1. はじめに

近年、「自然ブーム」「アウトドアブーム」と言われるように、自然とのかかわりを求める人が増えている。平成14年4月には、学校週五日制が完全実施され、長期休業のほか土曜日曜にも各種の団体が自然観察会やキャンプを企画し、多くの子どもたちが参加しているようである。しかし、かつては、自然とのかかわりをもつことは日常的なことであった。それが今日では、都市部ではもちろんのことながら、山間地の児童生徒においても、時間を忘れるほど自然の中で思い切り遊んだり、身近な動植物をつかまえたり、じっくり見つめたりという機会が大きく減少している。

多くの人が「自然と触れ合うことは大切であり必要である」という。だからこそ様々な観察会、野外活動などの自然体験がイベントとして企画されているといえる。特に家庭での体験の積み重ねを期待しにくい現代においては、学校教育や社会教育がそれを担っていかざるを得ないのが現状である。しかし、「自然体験により、どのような力がつくのか」という問いに対して、明確に答えている研究論文や報告は極めて少ない。また、それらの多くは理論的であり、実際の子どもの姿、特に長期的視点にたった子どもの成長の姿により明らかにされた例はほとんど見受けられないのである。

本研究では、筆者による長野県木曾郡南木曾町立蘭（あららぎ）小学校における生活科の単元「蘭川の探検」（平成6年度の実践）を取り上げ、その実践の分析と8年を経たの追跡調査の結果をもとに、生活科における自然体験の意義について、子どもたちの具体的な育ちの姿を通して明らかにしようとするものである。

## 2. 蘭小学校の概要

蘭小学校は、長野県の南端にあり、岐阜県との県境、標高約700mに位置する約130年の伝統をもつ。平成6年4月の全校児童数は51名という山間の小規模・少人数校である。地域と学校の結びつきは大変強く、毎年9月中旬の行われる運動会は、学校、公民館の共催として行われ、地域の大きなイベントの一つになっている。多くの小学校で行われている高学年児童による組体操はなく、その代わりに4年生以上の児童によって地域の伝統芸能である「さいとろさし」（男子）「大黒踊り」（女子）が披露される。8月末より地域の方が来校し、子どもたちに踊りの指導をするのである。近年、総合的な学習の時間などで、地域の方を外部講師として招く授業をよく見かけるが、この運動会の踊りのみならず、その先駆けともいえる実践が、日常の教育活動としてなされていた学校である。

学校教育目標は「(1)強くたくましい精神力と体力を育てる、(2)自分から考え、自ら実践していく子どもを育てる、(3)基礎学力を身につけ、創造的で発展性ある知性と技能を伸ばす、(4)自然を愛し、思いやりのある明るい子どもを育てる」である。この学校教育目標を受け、平成4年度から平成6年度の全校研究テーマは、「小規模校・少人数学級の特性を生かした学習指導はどうあったらよいか」と設定され、(1)学校の特性を生かしたものの、(2)地域のおいにするもの、この二点をキーワードとする教材開発が進められた。具体的には、社会科における「ろくろ細工」「蘭檜笠」など伝統工芸を教材化した授業、理科における地域に生息するカワニナなどの淡水貝を教材化した授業がその例として挙げられる。

## 3. 実践記録の分析

### 3.1 1年生の自然をとらえる感覚

平成6年度入学児童は9名、筆者が学級担任をした。筆者が発行した学級通信「せせらぎ」No.3（1994.4.6）には、入学式の翌日、6年生の教室の窓に当たって死んでしまったメジロを1年生に見せた時のやりとりが以下のように記述されている。

（前略）…メジロを見せた瞬間、みんなで「さわりたい」「さわりたい」と大騒ぎになりました。一人ひとり順番にてのひらにのせてみると、子どもたちからは「軽い」「思ったより重い」という声が聞こえてきました。次に興味をもったのは「つめ」です。さわってみては、「痛い、痛い」とまたまた大騒ぎ。H君は、「クワガタの角みたいだね」と言っていました。まさにその通りです。…（略）…T君は、風切り羽の先を引き出しました。すると、子どもたちが羽だと思っていたところから、たくさんの羽が出てきました。羽だと思っていたところは「雨覆い」。“カップ”みたいなものです。A女さんは、「羽を守っているんだ」と言いました。みんな、するどい観察力を持っています。…（略）…その後、みんなで土に埋めてあげました。

子どもたちは自身の五感を通してメジロをみつめ、同時にメジロへの興味、関心を高めて

いるのである。

また、学級通信「せせらぎ」No.9 (1994.4.14) には、4月13日の生活科の授業で学校のまわりを歩いた時、「つくしが出ていた」「チューリップが咲いていた」「ふきのとうがあった」という春探しについて記載されている。それに続けて、春探しとは直接関係ないが、「おばあちゃんのうちの近くの川に魚がいた」「順礼橋の下に背中に赤い点々のある魚がいた」という発言があり、川の話で盛り上がった。そこで、学校近くにある蘭川へみんなで行ってみることにになりました」とある。これが、「蘭川の探検」のきっかけであった。

### 3.2 蘭川の教材化と単元「蘭川の探検」の目標

学校から蘭川に最も近い場所は、徒歩5分ほどの支流である南沢川との合流点である。ここは、危険箇所として子どもたちだけでは行ってはいけない場所であるが、学校での活動として、探検クラブがイワナ釣りをしたり、数年前より多くの学年児童が川遊びをしたりする場所となっていた。砂、石、木、植物が豊富で、川にはカワゲラ、トビケラなどの水生昆虫、イワナなどの魚類が生息する自然豊かな環境である。自然に親しみながら、蘭の自然を体全体で感じたり、一人ひとりが思い切り自分を出せたりする環境ではないかという考えから単元「蘭川の探検」を設定し、蘭川を生活科活動の拠点とした。単元の目標は次のとおりである。

- 川で砂、石、木などを使って、砂遊び、水遊びなどを工夫し、友だちと楽しく遊ぶことができる
  - ・安全に注意して、友だちと楽しく遊ぶことができる
  - ・石、木などを使って工夫して遊ぶことができる
- 淡水生物に興味をもち、飼育、観察をすることができる
  - ・魚、水生昆虫をつかまえる工夫をすることができる
  - ・水生昆虫の飼育し、観察することができる

### 3.3 川遊びにおける仲間とのつながり

4月14日、蘭川と南沢川の合流点へと出かけた。主な目的は魚を探すことである。橋の上からは魚の姿を見つけることができず、川へ下りてみるようになった。

南沢川を少し上ってみるが、魚は見つからなかった。そこで、何より目についたのは、空缶やビン、ゴミ類であった。あまりのゴミの多さに、誰かが「今度、これ集めようよ」と言いはじめ、さっそく10数本の空缶やビンをみんなで拾い、学校まで持ち帰ることになった。教室に戻り、M女は「これから探検に行く時は、袋持っていこう」と次回からの活動について発言し、全員がこれに賛成したのである。

4月16日、2時間ゆっくり自由に遊んでみることにした。M女が手を水の中に入れ、「冷たい。でも、気持ちいい」と言うのに続けて、I男は、川の水で顔を洗い始めたのである。それに続けてほとんどの子が、同じように川の水で顔を洗い始めた。

前回は南沢川を少し上ったので、今回は蘭川を上ってみることになった。大きな石の上を歩くため大変歩きにくい、「ここ、滑るから気をつけてよ」(M女)、「この石、ぐらぐらするよ」(R男)とお互いに声を掛け合いながら進んでいき、幾分河原の広がっているところで自由遊びに入った。ここでの活動は、大きく次の三つに分かれた。

- a. 川虫(子どもたちは“ミズムシ”と呼んでいる)をとる(I男, H男, T男)
- b. 石を並べ、水の流れをせき止める(R男, M女, A子, K子)
- c. 木の葉の船を作り、川に流す(A女, K女)

特に「a」の活動については、全児童が興味を示し、途中からは全員が川虫とりをはじめた。また、K女が「お父さん、これ魚釣りの餌にしている」と発表したことから、T男は「今度は、魚釣りしてみたい」と発表した。そのほかこの時間には、「蘭川の水は、東京より青いし、大きな石があって、流れが速い」(I男:東京から引っ越してきた子)、「蘭川より、南沢川の水のほうが冷たかった」(H男)という発表もあった。

ここまでの活動では、子どもたちが体全体で川の美しさを感じ、もっときれいな川にしていこうとする気持ちを高めていると同時に、危険な場所を教え合ったり、お互いのよさや活動を認め合ったりしている姿がみられる。蘭川が、自然を感じる場であると同時に、人間関係を高める場となっているのである。

#### 3.4 地域に生息する生き物の飼育活動

4月28日の朝、T男が「先生、ビリッコもってきたよ」と言って、教室に入ってきた。子どもたちの言う“ビリッコ”とは、イワナやアマゴなど溪流魚の稚魚のことである。さっそく、みんなでじっくりながめることにする。M女は「体に縞々があるよ」と特徴を見つけた。I男の「水の温度を、ビリッコのいた所の温度と同じにしなきゃいけないんじゃない」という意見から、T男につかまえた場所を聞き、全員でその場所へ行くことになったのである。

5月7日、T男の案内により、金時橋近くの小さな小川(額付川の枝沢)にビリッコをとりに行った。石の陰や、張り出した木の根元に網を入れては魚を探すが、なかなか見つけることはできない。少し時間がたつとT男、H男、K子は、持ってきたサンダルに履き替えて、水の中に入っていった。しかし、結局、ビリッコを見つけることはできなかった。その後、順礼橋下に移動をした。ここでも魚は見つからなかったが、たくさんの川虫を見つけ、魚(ビリッコ)とりは、川虫とりへと変わったのである。

5月20日、川虫とりに額付川と蘭川の双方へ出かけた。額付川では、大きめのものが見たが、蘭川では小さいものばかりであった。H男は「蘭川の水は冷たいから、川虫が小さいんじゃない」と大きさの違いについての考えを発表した。また、子どもたちの中から「川虫を飼って見たい」という声が聞かれるようになってきた。特に、人気があったのは“いもむしみたいなの”(これは子どもたちの呼び方で、分類上はヒゲナガカワトビケラの幼虫)である。他の川虫と違い、この虫だけ巣の中にいることがわかっていたためである。

5月25日、川虫（特に“いもむしみたいなの”）をとりに、額付川に出かけた。水量が少なく大きな石に集中していたため、採取するのは楽であったが、飼育用の砂や石を運ぶのが大変であった。事前に川虫を飼うにはどうしたらいいかを検討したとき、その場所の石や砂を持ってくるといった意見が出されたためである。誰に言われることなく、男子を中心に体の大きな子たちが石や砂の入ったバケツを持ち、履き替えようのサンダルや網を女子が手分けをして持ち帰った。教室に戻り、タライに砂、石、水を入れ、その中にカワムシを入れた。子どもたちの興味は“いもむしみたいなの”は、どうやって巣を作るのかであった。

また、この川虫とりの時には、思わぬ感動的な場面に出くわすことができた。そのことについて、学級通信「せせらぎ」No.37（1994.5.26）では、以下のように記している。

川の中で2匹の川虫のさなぎに出会いました。学校に持って行って観察することになり、結局1匹は、運んでくる途中で急激に乾燥してしまったためか死んでしまったのですが、もう1匹は、水槽の中で羽化を始めたのです。それを運んでくるT男君は必死でした。水面より上に出て、水槽の側面で羽を乾かしている成虫を落とさないように気を使っていました。


全員で、きちんと確かめたのは学校でですが、いもむしの時とは似ても似つかない姿にみんな驚いていました。決してきれいな虫とはいえませんが、生命の神秘の一端にふれた感じです。

ここでの主たる活動は飼育活動である。一例目のビリッコでは、教室での飼育活動と並行し、学級全体で生息場所を確認しに出かけている。これは、生き物を飼育する上で重要な意味を持っている。その生き物がどのような環境にすんでいるのかを確認し、教室での


テーマ 「とびけらのようちゅうは、ちからもちだけど、めんどくさがりや」

蘭小学校 1ねん 9めい ぜんいん


1. あららぎ川へたんけんに行ったよ  
 4がつかから、なんども、あららぎ川へ行ってあそんだ。さかなもおよいでいたし、おとうさんたちが、つりのえさにする「かわむし」もいた。




かわむし(なまえは、ずかんでしらべた)



かわむし(なまえは、ずかんでしらべた)




きょうしつにもつてかえって、かうごとにした(5/27)。




とびけらのようちゅうだけがつくった(5/28)。


2. きょうしつでかんさつしたよ  
 わかった




とびけらのようちゅう1匹を、かんさつしやすいうちに、まるいがらすのすいそうにいれた(6/2)。



しっぽにあるはさみみたいところに、小さないしをはさんで、ほこりていた。



あたまたより大きいいしを、あたまでおしてはこんでいた。




口からいとをだして、いしをつないでいた。


☆とびけらのようちゅうは、ちからもちだ!

あれ? ・おきかない(すをつくらない)のちかくのいしは、つかってないな。

3. こんどはじっけんだ  
 じっけんをした



みんなの大きないしをかくには、小さないしをおかないことにした(6/13)。




わかった、わかった


はじっこのはうへもいつたけれど、いしをはこぼうともしないので、1しゅうかんたってもすはでななかった。

☆とびけらのようちゅうは、ちからもちなのに、大きないしをかくには、小さないしがなければ、すをつくらない めんどくさがりやだ。

4. それからのわたしち  
 ・むたいづけ川にもたんけんに行った。⇒ やっぱりかわむしがいたよ。



たくさんかわむしがとれたので、それをえさにして、あららぎ川でさかなつりをしたよ。



あれ、あれ? ・あららぎ川より、大きいぞ。

あれ、あれ? ・あららぎ川より、大きいぞ。

・たらいでかっていた「とびけら」がせいじゅうになったよ。

◇しらべてみよう。

図1 トビケラの観察記録

飼育環境を整えていくことは、科学的な見方を培い、その生き物への思いを高めていくことへつながる。二例目の川虫の場合も同様である。採集した場所で重い大きな石や砂を運ぶことはたいへんなことであるが、その生き物への思いがあるからこそできる行動である。けっして川虫は「きれい」とか「かわいい」というものではないが、神秘的な世界にふれ、愛情を込めた飼育活動が可能である。これは、川虫が身近な地域に生息し、子どもたちとのかかわりが強い生き物であるからにほかならない。

また、11月には木曾川漁業協同組合にお願いし、イワナの発眼卵をいただいた。その管理と観察を行い、蘭川に放流することを目的としている。小さな卵から生まれてくる生命に直接触れ、飼育活動を続け、3月には蘭川に放流できた。自分たちの足元である地域をみつめるために、地域の方に協力していただいた。1年生の子どもたちにとっては、イワナに対する思いをさらに高めていったのである。

### 3.5 魚釣りの体験と家庭での聞き取り調査

子どもたちの「魚釣りをしたい」という希望が強く、6月3日の学習参観の際、蘭川に出かけた。半数ぐらいの子が、家の人が魚釣りをするというので、事前に家の人から魚釣りの方法や気をつけることについて聞き取りをしてくることになった。

「大きな石の近くにいる」「滝みたいに水の落ちているところにいる」「餌をゆっくり流すといい」「大きな音を出すと、魚が逃げてしまう」ということが発表された。聞き取りの対象は父親、祖父であった。餌にする川虫を前日、額付川までとりに出かけ、道具は用意できる子たちで持ちより、交代で使うことにする。

当日は、気温、水温ともに高めで、水量も少なく、水の透明度も高かったため、コンディションとしてはよくなかった。結局、40分ほどやったが成果なし。しかし、担任（筆者）が「釣れないから、水の中に入って遊んでもいいよ」と言っても、魚釣りを続けるほど、「魚を釣ろう」という気持ちが強かったようである。

M女がうまく餌をつけることができないでいると、T男が近くにきて、代わりに針に餌をつけたり、絡んだ仕掛けを根気よく戻そうとするH男の姿があった。後半は参観に来ていたお母さん方も参加したが、やはり釣れなかった。K子は、盛んに母親に餌の流し方を教えていた。お母さん方の多くが、その場所へ行くことが初めてであり、溪流釣りをするのも初めてであったようである。

父親や祖父に釣り方を教えてもらったものの子どもたちは、言われた通りにやってみるが、1匹も釣るとことはできなかった。それだけ溪流魚を釣るのは難しく、父親や祖父のすごさを感じていた。しかし、川のせせらぎを聞きながら、自然の中で釣り糸をたれる楽しさは実感できたようである。その後、数名が家の人と釣りに出かけたことから、そのことがわかる。

### 3.6 原体験としての川での泳ぎ

川に行き始めた頃より、大きな淵で泳ぐことを筆者も子どもたちも考えていた。しかし、1学期中は水温が低く、実現できたのは2学期になってからであった。

8月25日、蘭川と南沢川の合流点で泳ぐことにした。前日には、学級園で栽培しているミニトマト、キュウリを収穫し、おやつ代わりに準備をした。朝から曇りがちであったが、2時間目の終わりごろより日が差してきたので、水着を着て川へと向かった。

6、7月と水量は少なめであったが、夏休み明け水量は増しており、南沢川最下部の淵は、絶好のプールとなっていたのである。まず、ミニトマトとキュウリを川の水で冷やしてから川に入った。入った瞬間は冷たく感じられたが、徐々にその水温にも慣れてくると、I男、H男、T男は水の中に潜り始めた。T男が「魚が、泳いでる」と言うと、全員が川底に目を向けるようになった。見つけられなかった子もいるが、川で魚を見つけたのはこれが初めてである。持っていった網を差し出し、捕まえようとするが魚はつかまらなかった。魚を追いまわした後、H男は「こっちは、深すぎるから来ないほうがいいよ」、K女は「ここに、ガラスのかけらがあるよ」と、みんなに注意を呼びかけた。泳ぎの苦手な子たちは、浅いところで砂遊びをしていたが、A女、A子、K子の持ってきた浮き輪を使って、水の流れを楽しむようになった。

1時間ほどしたところで、川から出て休憩にした。先にも触れたように、おやつとしてミニトマトと、キュウリを持って来ていったので、それを食べることにした。包丁を用意してきたので、キュウリも切ってみることにする。A女、A子を中心に、食べやすく切り分けることができた。

その後、蘭川へ行くが、子どもたちは、見かけよりも水の流れの速いことに気づき、むやみに泳ごうとはせず、浅いところで遊んでいた。ここでの活動は、まさに原体験である。もちろん、これまで記してきた「川遊び」や「生き物を飼うこと」も原体験の一つとして考えてよいが、川で泳ぎ、魚を見つけ、それをつかまえようとするこの行動は、生物としての「ヒト」の捕食行動である。その中で、川の美しさとともに、川底の深さ水の流れを体全体で感じ、川の危険性を感じとっていったといえる。また、同時に川のありがたさや大切さも学んでいくのである。

## 4. 追跡調査の結果と考察

### 4.1 調査の内容

子どもたちと筆者のとかかわりは1年間だけであった。彼らが2年生になるとき筆者は異動となったのである。それから8年程が経過し、当時、小学校1年生であった子どもたちは、平成14年4月現在、中学3年生になっている。児童9名のうち1名は小学校2年時途中に転出し現住所が不明なため、残る8名(全員が南木曾町立南木曾中学校3年在学)に対して質問紙によるアンケート調査を実施した。

被験者数は8名と大変少ないため、「当時のことをどの程度記憶しているか」「当時の活動を、どのように評価しているか」など、質的なデータを収集することを主な目的として

いる。調査項目は大きく2点である

- (1) 小学校1年生当時の活動「蘭川の探検」を、どの程度覚えているのか
- (2) 「蘭川の探検」を、現在どのように評価しているのか

平成14年8月21日に発送し、提出期限は平成14年9月9日とした(郵送)。被験者は先に触れた平成6年度南木曾町立蘭小学校入学児童9名中8名である。

#### 4.2 自然体験的活動に関する記憶の鮮明さ

質問紙は8名に配布し、8名全員から回答を得た(回答率100%)であった。被験者の小学校1年生のときに生活科で行った川での活動について、どのくらい覚えているか質問したのが図2である。質問した6項目すべてにおいて約75%以上が「よく覚えている」と答え、特に「蘭川に行って、泳いだことを覚えていますか」「蘭川や額付川に行って、川虫(トビケラの幼虫など)を採ったことを覚えていますか」という問いについては、100%の被験者が「よく覚えている」と回答している。それぞれの活動が、子どもたちの記憶に強く残っていることがわかる。

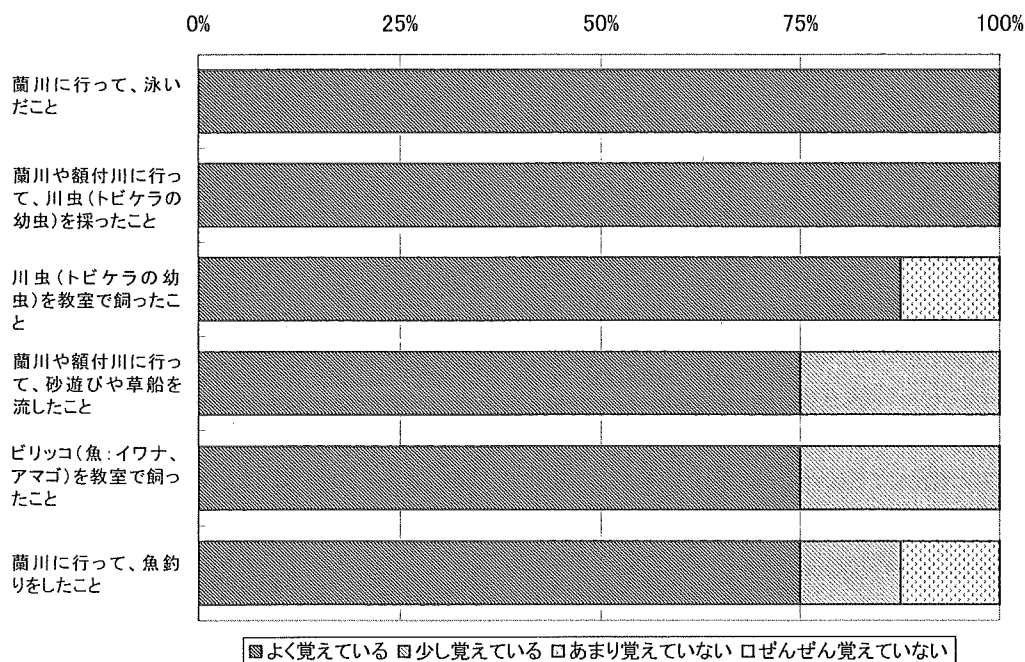


図2 小学校1年生の活動についての記憶

また、生活科で行った川での活動について、エピソード、思い出などを自由に記述してもらったところ、以下のような回答が得られた。

- ・川虫を採って、自由研究を1年生の時に、全員でやったのをよく覚えています(全員で川虫の絵を描いたりした)。
- ・よく川に行って、つかまえた虫を学校に持ち帰って「観察日記」をつけたり、調べたこ



とを班ごとに発表したのをよく覚えています。結構、楽しかったです。

- ・わたしは、今、「空」の写真を撮っているのですが、こんなことができる南木曾に住んでいるからだと思います。1年生のとき、川で遊んだことや野鳥のことは忘れません。
- ・すごくなつかしいです。特に覚えているのが「蘭川で魚釣りをしたこと」「蘭川で泳いだこと」です。先生はすごく鳥が好きでしたよね。だから、蘭小学校で鳥をいっぱい見たし、自然についていろいろ学んだように思います。鳥の名前もいっぱい覚えまして。私たちのまわりには、いっぱい自然があって、今でも自然のことについて調べています。自然の大切さがわかります。
- ・額付川に行って川虫の幼虫をつかまえて、学校へ帰って来る時、川虫が成虫になってT男君の水槽から飛び立っていったことです。
- ・魚釣りをしたときに、針が指にささってしまった。

ここでの記述でわかるように、被験者が「よく覚えている」こととは、「川虫をとったこと」「川虫を飼ったこと」「魚釣りをしたこと」という内容であると同時に、「川虫を自分の手でつかまえた」「川虫の変化の様子をみた」「針がささって痛かった」という五感を通した体験的活動そのものの鮮明な記憶である。

#### 4.3 被験者による自然体験活動への評価

「自分の子どもにも同様の体験をしてもらいたいと思うか」という質問をしたところ、75%の被験者が「そう思う」、残り 25%の被験者が「少しそう思う」と答えており、自然体験活動について肯定的な評価をくだしていることがわかる(図3)。それぞれの理由は以下のとおりである。

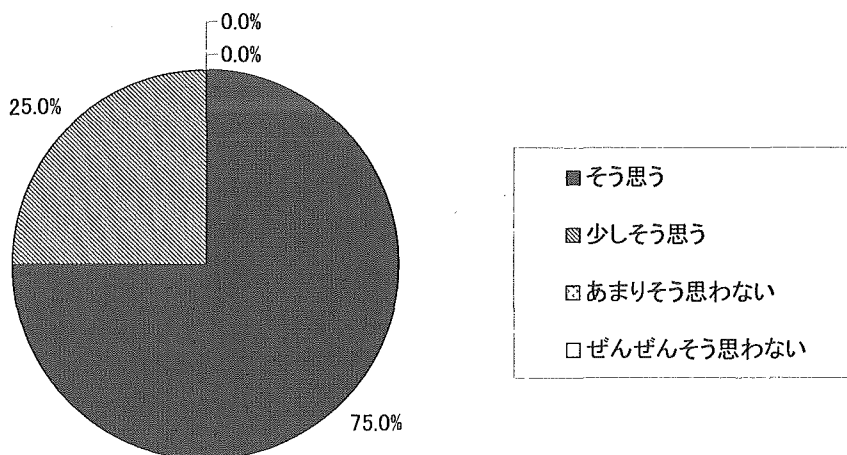


図3 自分子どもにも自分と同様の体験をしてもらいたいと思うか

##### ○「そう思う」と答えた理由

- ・自然の美しさを、体で実感してもらいたいから
- ・一生のうち、1回だけでも、あのような経験をさせたほうがためになるし、自然とい

うものを知ってもらいたいから

- ・実際に、自然にふれて学んでももらいたいと思います。やはり、今思うと、小学校の時に自然にふれたおかげで、今でも自然に対して深く考えることができると思います
- ・自分が楽しかったから
- ・自然といっしょにいろいろな体験をしてほしいです

○「少しそう思う」と答えた理由

- ・少しでも自然のことをしてほしいと思うから
- ・自分でも魚釣りなどをして楽しかったから

「自分のこどもにも同じような体験をさせたいか」という問いに対して、被験者の記述は、自分の体験や思いを反映した内容であり、すべてが肯定的なものであった。

## 5. おわりに

単元「蘭川の探検」のきっかけは、子どもたちと自然とのかかわりであった。しかし、活動の中で友だちと危険箇所を教え合ったり、自然な形で役割分担をしたりしている。これは、教師からの指示によるものではなく、子どもたちの自発的なものである。学級という集団で自然体験を行う場合、対象への働きかけは、活動の中心が自然とのかかわりであっても、それを通して仲間とかかわりあい、自然、社会、そして自分とつながりをもっていくのである。そして、その中で社会的なスキル、コミュニケーション力などが育てられていく。

8年が過ぎた現在でも当時のことをよく覚えており、その記憶も鮮明である。それだけ印象が強かったといえよう。五感を通して身体全体で学んだこと、しかも継続的に取り組んだことは忘れにくいといえる。また、「自分たちが体験してきたことを、自分の子どもにも体験してもらいたいと思うか」という問いに対して、ほぼ全員が「そう思う」または「少しそう思う」と回答している。その理由は様々であるが、「子どもにさせたい＝自分が体験したことがよかった」ということであり、自分たちの活動が意味あることであったと評価しているのである。そして、現在でも彼らは自然とのかかわりを求めていることがわかった。これは、自然への興味・関心の高さを示している。

## 文献

塩原孝茂，2002，「自然体験の教育効果に関する研究」『教材学研究』，13，日本教材学会

青少年教育活動研究会，1995，『文部省委嘱調査：子どもたちの自然体験・生活体験に関する調査研究』

青少年教育活動研究会，1999，『文部省委嘱調査：子どもの体験活動等に関するアンケート調査報告書』

野田敦敬，2001，「初等教育における自然体験の重要性」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』，4

(2003年4月30日 受付)